The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「源氏」「とりかへばや」の番いについて ： 「物語後百番歌合」の配列から
Author(s)	大槻, 修
Citation	語文. 1987, 48, p. 72-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「源氏」「とりかへばや」の番いについて

――「物語後百番歌合」の配列から――

大槻　修

序

藤原定家は「物語二百番歌合」の「後百番歌合」を撰するに際して、「源氏物語」「とりかへばや（取替波也）」計六番の番いに、「今とりかへばや」を用いず、古本「とりかへばや」を採用したことは周知の通りである。ただ「無名草子」評言は、古本よりも今本を称揚して

只今聞えつる「今とりかへばや」などの、本にまさり侍るさまよ。何事も物真似びは、必ず本には劣るわざなるを、これは、いと憎からずをかしくこそあめれ。言葉遣ひ・歌なども、悪しくもなし。おびただしく恐ろしき所などもなかめり。

と述べ、また「隠れ簑」の批評に関連して、

「今とりかへばや」とていといたきもの、今の世に出で来たるやうに、「今隠れ簑」といふものをしいだす人の侍れかし。今の世には、見どころありてし出づる人もありなむかし。むげにこの頃となりて出で来たり、とて、少々見侍りしは、古きものどもよりはなかなか心ありてこそ見え侍りしか＝新潮日本古典集成「無名草子」（昭和五十一年十二月、新潮社に拠る。以下引用本文は同然。

と同じ態度を示している。一般に、俊成卿女作と称せられる「無名草子」なればこそ、この両者の態度の相違は注目されるところであろう。かつて樋口芳麻呂氏[1]は、「無名草子」成立のすぐ前に「物語二百番歌合」の成ったことに触れて、両者を比較・検討され、

俊成卿女は、「物語二百番歌合」の歌人定家の選歌を重んじつつも、否、重んずるが故に、それとは別趣な、物語自体の批評を、「無名草子」で展開したのではなかろうか。

と述べられた。ここに「後百番歌合」で古本「とりかへばや」から六首の歌を選び、「源氏物語」からの歌六首と番わせた定家の撰歌態度、歌合せに対する姿勢などを分析することも意味なしとはしないであろう。なお遺憾とすべきは、古本「とりかへばや」散佚という現状であり、わずか六首（うち一首は今本と共通するが）の断片資料もて、今は亡き古本の、詳細な物語展開、行間に滲む微妙な情趣などをどの程度汲みあげ得るか―定家の撰歌態度を分析する上での隘路は数限りなく多い。ただ、ふり返って考えるに、「源氏物語」「古本とりかへばや」の番い一つ一つから、逆に古本の物語場面のそれぞれを想定することも不可能ではあるまい。つまり①左に位置する「源氏物語」の詞書や歌の表記、②またそれを物語本文に据え戻すこと―によって、右に位する古本の、歌を含んだ物語場面を復元する材料に利用するのである。いままで、散佚物語の復元に際して、「無名草子」評言や「風葉和歌集」、さらに「後百番歌合」の右

に位する歌などを縦横に駆使はされてきたものの、歌合の番いという観点から、左の歌の表記をも参加させることは案外少なかったように思われる。その意味合いをも含めて、ここに「後百番歌合」のうち「源氏」「とりかへばや」計六番の番いを考えてみたい。

なお古本「とりかへばや」復元に関する松尾聡氏[2]および小木喬氏[3]のご研究に負うところ多く、また「物語二百番歌合」の番いに関する先達の樋口芳麻呂氏[4]に、方法論を学ぶところなど大であったことをも記しておきたい。また拙稿「源氏・夜の寝覚」の番いについて―「物語後百番歌合」の配列から―〈上〉‖「甲南国文」第三十二号および同〈下〉‖甲南女子大学「研究紀要」第22号を参照願えれば幸甚である。

一

まず、「後百番歌合」の八十四番、「源氏」「とりかへばや」最初の番いを考察する。（引用本文は日本古典文学影印叢刊 14 「物語二百番歌合―風葉和歌集桂切」（昭和五十五年八月、日本古典文学会）に拠る。ただ適宜、漢字に直し、仮名遣いを改めたが、その場合、本文表記を振り仮名の位置にとどめた。また活用語尾等を補った折は、同じく振り仮名の位置に・印を設けた。なお私意に「 」や句読点、濁点を付けている）。八十四番の表記は次の通りである。

左　長雨のころ浮舟の君に　　右大将
みづまさるをちの里人いかならむはれぬながめにかきくらすころ

右　権中納言はじめて、「これやさは入りてはしげき道ならむ山道しるくまどひぬるかな」と侍りける返し　　右大臣四君
ふもとよりいかなる道にまどふらむ行方も知らぬをちこちの山

左の歌は「源氏物語」浮舟の巻から。浮舟に寄こした薫（右大将）の詠である（〔⑦―五三〕‖⑦は日本古典全書「源氏物語」の第七分冊、〔五三〕はその項目番号を示す。以下同然。）橘の小島に永遠の愛を誓っての第二日（四九）、浮舟への執心まさる匂宮は、帰京後も彼女のもとに文。時に「雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えて、わりなく思されければ」の頃であった〔五一〕。

一方、匂宮と薫と双方の男性に惹かれる浮舟が煩悶の折から、「かの殿より御使あり」〔五一〕。それは白い色紙に立文、書きざま故々しい薫の詠。ただ、匂宮と薫と双方からの文に対して、物語本文は、「これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥し給へれば、侍従右近見合せて、「なほ移りにけり」など、言はぬやうにていふ」と記す〔五二〕。

右は、「後百番歌合」に六首とられた「古とりかへばや」の歌の中で、「今とりかへばや」にも見られる唯一の歌。時の三位中将（今本。本姓は女）を四女の婿にと願う右大臣に対して、若君の父左大臣も苦笑しながら話に応じ、ここに女中納言から四の君へ（「これやさは―」の歌）、四の君から若君へ（「ふもとより―」の歌）と、最初の懸想文の交換が終ったところ。なお「風葉和歌集」巻十一、恋一に、「男のはじめて、「これやさは入りてはしげき道ならむ山口しるくまどはるるかな」といへりける返りごとに　とりかへばやの前関白・四君」として、「ふもとよりいかなる道にまどふらむ行くへもしらずをちこちの山」とある（引用本文は、「増訂校本風葉和歌集」‖昭和四十五年一月、友山文庫‖に拠り、表記の仕方は「後百番総合」の場合に準じる）。「今とりかへばや」の表記と比べるに、「後百番歌合」の若君の歌（詞書中にある）の第四句「山道しるく」は、「風葉集」や「今本」のように「山口しるく」の誤りであろう。小木氏は、「定家と

もあろう人が気がつかぬはずはない。あるいは翻刻または印刷のミスではあるまいか」と疑っておられるが、前記の影印叢刊も「やまみちしるく」となっている。また結句「まどひぬるかな」も、小木氏のいわれる通り「まどはるるかな」（『風葉集』「今本」とも）の方がよろしかろう（鈴木弘道氏「とりかへばや物語　本文と校異」＝昭和五十三年三月、大学堂書店＝を見ると、今本の場合に「まとひぬるかな」の本文はない。「風葉集」の場合を併せ考えるに、古本の本文として「まとひぬるかな」「まとはるるかな」の両方があったか。なお鈴木氏の同著によると、「ふもとより―」の歌の第四句は、今本の場合も「ゆくへもしらぬ」「ゆくへもしらず」の両方がある）。

左右の歌を比べると、共通語句として「をちの里人」（八十四・左）「をちこちのやま」（同右）がある。また薫の贈歌に対して浮舟から「つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて」（五五）の返しがあり、一方の右歌も、表記された通り女中納言の贈歌（詞書中にある）に対する四の君の返しである。

物語の内容面から見ると、橘の小島以来、匂宮に心魅せられた浮舟だが薫にも惹かれる自分に煩悶（五一）、母君を慕う日々だったが、ついに薫・匂宮の使者が来合わせ（六三）、彼女の身は一挙に奈落の底に落ち込んでゆく。いわば浮舟がわが身を持するに精一杯のところ、身を律するも律せぬも、いまが最後の機会であった。かかる重要な場面なればこそ定家は「後百番歌合」三十五番左に、「宇治にて長雨はれぬころ、大将、「みづまさるをちの里人いかならむはれぬながめにかきくらすころ」と侍りければ　浮舟」と題して、「里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き」を入集している。三十五番左の場合は詞書中とはいえ、「みづまさる―」の歌を、八十四番左をも含めて二回も選んだところに、いかに定家がこの歌に執着したかを察し得よう。ちなみに「後百番歌合」に入集された「源氏物語」の歌を、その巻別に数えると、須磨の巻十首を最高に、浮舟の巻八首が第二位である。

一方、「とりかへばや」の場合、いわば無責任な左大臣夫妻の了解のもと、女中納言（今本の場合、この贈歌の折の身分は「三位中将」である）と四の君との不幸な人生がスタートする。契らぬ妻としての四の君は、やがて好色の宰相中将と不倫の仲となり、加えて女中納言また宰相に犯されて―と、人的配置こそ異なれ、薫・浮舟の不幸に転落するスタートに類して、これもまた女中納言・四の君の、あやにくな関係の始まりであった。その意味で「風葉集」の折もまた

左→右
〈八十四番〉

この贈答に注目したに違いない。なお今本の場合、贈答歌として物語の最初に位し、今は亡き古本のそれを改作せずに、そのまま取り込んだものと解せられようか。まさしく「後百番歌合」一番右で、「夜の寝覚」から物語開巻筆頭に位する歌が選ばれ、改作本「夜寝覚」も、その歌だけは改めていないケースと同じい。そこに定家の意図的な入集態度を考えて間違いなかろうと信ずる。「後百番歌合」右に選ばれた十物語それぞれの始めの歌が、いかに慎重な態度で番わされているか、その一端をかいま見る思いである。

ここに、八十四番の番いは、八十三番からの連想・対応を一応切り離すとして、一般の歌合の場合に准ずると、上掲の図のような方向を考えてよいのではなかろうか。なお、定家が四の君の歌をもって、「とりかへばや」の番いをスタートさせた伴について、「無名草子」評言に触れておきたい。周知の通り、四の君の評価は古本と今本では逆になっており、古本では「四の君こそいみじけれ。あら

まほしくよき人にて侍り」とあり、今本は「四の君ぞこれはにくき」としている。ここに小木氏の論を引用しておきたい。

今本のこの女は、男中納言が現われると、手もなく、宰相を捨てて、その方にころがりこんで、二条殿に住んだとされて、まことに無節操な女として描かれているが、古本のは全く反対の人物のようである。そして物語後編では、むしろ悲劇のヒロインとして、この四君が中心人物であったように臆測されるのである。

あるいはこうしたところに、浮舟的なものを愛する定家の嗜好ともいうべきものがあったのかも知れない。

二

八十五番に移る。

左　北山にて、「初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞこぼるる」と侍りける御返り　故右衛門督室　紫上祖母

まくらゆふ今宵ばかりのつゆけさを深山のこけにくらべざらなむ

右　心地例ならでこもりゐ給へるころ、月を見て　権中納言　後内大臣上

雲となり煙となりむ夕べにも今宵の月のかげを忘るな

左は若紫の巻から。瘧病で北山に赴いた光源氏は、僧都の坊に紫の上を垣間見る〔①—五〕が、その素性を聞いて、彼女を思慕し、わが心を歌に托して尼君に訴える条〔八〕とその返歌である。物語本文に、「さるにては、かの若草を、いかで聞い給へることぞ」とあり、尼君がそのように疑ったのは、例の「雀の子を犬君が逃しつる」の一件につき、慨嘆する尼君が「おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらかす露ぞ消えむそらなき」と歌ったことによる。なお傍の女房が「はつ草の生ひゆく末を知らぬまにいかでか露の消えむとあらむ」と唱和している〔五〕。

右は、宰相の子を宿している女中納言の詠。詞書「心地例ならで」は懐姙を意味していよう。一首の意は、「もしわたしが死んでも、こよいこうして一緒に見た月の情景を忘れて下さるな」と、小木氏の訳すところで、かつ女中納言の独詠ではなく、母、乳母あるいは胎児の父であろう宰相か、ともあれ言いかける相手を想定される。

続いて小木氏は、

この出産の場所はどこであろうか。今本では、月ごとに乳母の里に病と称してはい隠れたとあるが、出産に当っては宇治に姿を隠している。あくまで秘密を必要としたからである。これは古本でも同様に、月ごとのは乳母の里でもよかったであろうが、出産の場合はもっと離れた場所を選んだに違いないと思うのである。人目まれな淋しい場所を。

と説かれる。それも一つの考えだが、この詠は出産を目前にした折のものでなく（小木氏は「心ちれいならで」は出産を意味している—として、出産目前の情景を想定される）、いまだ懐姙に苦しんでいる時点とも考え得よう。今本によると、時の四月、身重の体に困った女大将（今本は、すでに身分が中納言から変っている）は権中納言（前の宰相中将）の進言によって宇治の中納言邸に潜入、女姿に戻る。なお四の君に執着する中納言を恨み、身の不幸をなげく条に、

「いかにしやるべきわが身にか」と、悲しきままに、しをしをとうち泣きくらさるるに、暮れて月いと明るく、水の面も澄み

渡るに、いと思ひ出づること尽きせず、胸よりあまる心地ぞする。

思ひきや身を宇治川にすむ月のあるかなきかの影を見むとは（引用本文は学術文庫「とりかへばや」＝昭和五十三年十月、講談社に拠る。以下同然）

とある。この歌は、女大将の独詠であるが、古本にも似通った場面設定があり、四の君のもとに立ち去る彼を見送ったあと、しみじみ心情を吐露する独詠歌とも考え得るのではなかろうか。ちなみに、「思ひきや―」の歌は、「風葉集」巻十七、雑二に、詞書「忍びて宇治に住み給ひけるころ、月あと明かう水の面も澄みわたれるに、いとど思し出づること多くて　今とりかへばやの中将」として入集されている。

さて、八十四番と八十五番との関連を見るに、左に関しては「をちの里人」「はれぬながめ」「かきくらす」（八十四）に対して「深山のこけ」「旅寝の袖もつゆぞこぼるる」「つゆけさを」（八十五）など類似した語句は見られるが、物語内容の面からは、より密接な連繋がなく、むしろ八十四番左と八十五番右との間に深いつながりを見たい。

一、「はれぬながめにかきくらす」（八十四）薫は、宇治の浮舟の面影を追って涙に沈むが、一方の女中納言もまた身重の身を宇治の宰相邸に潜めて、「しをしをとうち泣きくらす」（今本の当該場面を引用する）日々であった。

一、「みづまさる」（八十四）宇治と「水の面も澄み渡る」（八十五）宇治と共通している。

一、「源氏物語」浮舟の巻に深い愛着を寄せる定家の心情は、女姿に戻れぬまま宇治に苦悩の身を横たえる女大将のもとに及んだか。

こうした照応の基礎に、古本「とりかへばや」の当該場面を、今本のそれに拠った理由を改めて述べておきたい。前述のように、今本によると、懐姫の女大将（古本「権中納言」）は「月いと明かく」「思ひ出づること尽きせず、胸よりあまる」心情のもと、「―すむ月のあるかなきかの影を見むとは」と詠んでいる（「風葉集」入集の折の詞書にも「忍びて宇治に―」とある）。こうした記述は、八十五番右の詞書「心地例ならでこもりゐ給へる」「月を見て」だとか、「雲となり煙とならむ」「月の影」などの表現と二重写しになるというべく、男装の姿のまま出産云々はともかくとして古本の描写の推定に、今本の当該場面を考慮して大きな誤りはなかろうと思うのである。ついで八十四番右と八十五番左との照応を考えると、

一、「入りてはしげき道ならむ」「山道（ロ）しるく」「いかなる道」「をちこちの山」（八十四）に対して、「北山」「旅寝」「深山のこけ」（八十五）と共通している。

一、ともに詞書の中の歌を含めて贈答の形を取っている。

の二点を挙げ得よう。八十四番右から八十五番左への関連は薄い。八十五番の番いは、光源氏が瘧病で北山に赴いた折の出来事ではあるが、一方の女中納言は懐姫の身の「心地例ならぬ」折とて、内容面にはさして共通性を唱えるに当らず、以上の諸点から八十四番・八十五番の展開を上図のような方向で考えておきたい。なお小木氏は、八十五番右の歌の「雲となり煙とならむ」について、

〈八十五番〉
左　右
左　右
〈八十四番〉

無名草子に言う「死に入り、よみがへるほどこそ、おびただし

く恐ろしけれ」の、女君が実際に死ぬことを暗示した、あるいは予告したものと考えられるのである。

と述べておられる。

三

ついで八十六番に移ろう。

左　須磨の別れのころ、鏡を見給ふとて、紫の上に

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影ははなれじ

右　あらぬさまに思ひなりて、かきこもりなむとて、四の君のもとに、あからさまに立ち入りて、出づるに笛を吹きすさびて

権中納言

忍ぶべきふしもあらじな笛竹のこの世をかぎる音をつくすとも

左は須磨の巻から光源氏の歌。須磨引退を前に、親しい人々に訣別する源氏が、西の対に紫の上を訪ねて鏡に向かい唱和する(②―一一)場面。物語本文に、「鏡台に寄り給へるに、面痩せ給へる影の、われながらいとあてに清らなれば、「こよなうこそおとろへにけれ。この影のやうにや痩せて侍る。あはれなるわざかな」と宣へば、女君、涙を一目うけて見おこせ給へる、いと忍び難し」とある。なお紫の上の返し「わかれても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし」。また「風葉集」巻八、離別に、詞書「須磨に移ろひ給はむとするころ、鏡台に寄り給ひて、「こよなうこそ衰へにけれ」とて　六条院御歌」として入集されている。

右の歌は、同じく「風葉集」巻十七、雑二に詞書「思ひのほかなる身の振舞を、もとの姿に改め侍らむとて出でけるに、年頃もてならしける笛を吹きたてて　とりかへばやの権中納言母」として入集、なお結句「音はつくすとも」とする。この場面を今本に想定すると、所狭き身の女大将が、吉野の人々との別れを経て、四の君と逢い、

「もし世になくもなりなば、あはれともおぼしぬべくや」とさし寄りて問ひ聞え給へば、恥らひてうち赤む色、いとをかしげにほひて、

遅るべきわが身の憂さにあらばこそ人をあはれとかけてしのばめ

とうちまぎらはし給へる、児めきらうたげなれど……

しのばれむわが身と思はばいかばかり君をあはれと思ひ置かまし

と歌う条に当ろう。こうして女中納言は宮中に入って男尚侍と訣別し、宰相からの迎えの車に乗って宇治へゆく途中、笛を吹きすさぶに至る。やがて女姿に戻り出産する。

かかる順序を古本と比べるに、「女中納言こそ、いといみじげにて、髻ゆるして子生みたるなど」の「無名草子」評言を軸にして、小木氏の説かれるごとく、大分違っているようだ。つまり古本の方は、まず出産(男装のまま)があり、その後に「もとの姿に改め侍らむ」(「風葉集」詞書)と家を出る折、「四の君のもとに、あからさまに立ち入」る次第。整理すれば、今本は①四の君と別れ②尚侍と別れ③宇治行きの途次に笛を吹く④女姿に戻る⑤出産―となるが、古本は①出産(男装のまま)②女姿に戻ろうと決心③四の君と別れ④帰途に笛を吹く―といった順序であったか。

ただ、「無名草子」評言に、「女中納言の死に入り、甦へるほどこそ、おびただしく恐ろしけれ。鏡持て来て、万のこと、暗からず見たるほど、まことしからぬことどもの、いと恐ろしぎまでこそ侍れ」という有名な一節がある。この点に関して小木氏は、

男装のままで出産したのは、その時女中納言が、お産がすんでから、再び男装のままで世に出で交らおうと考えていたことを示すものである。それがこのCC′（私注―「後百番歌合」「風葉集」入集の当該歌のこと）で、「あらぬさまに思ひなりて」「もとのすがたにあらためはべらむ」ということになったのは、出産の後の死と蘇生、そしてその間において「鏡もてきて、よろづの事暗からず見た」ことによるものと考えざるを得ないのである。女中納言は、その鏡において、自分の因果関係をさとられたのである。そして、身体が回復するとともに、男装のままで一旦は、みんなの前に姿を現わしたが、ようやく本来の女の姿に返ろうと「思ひなりて」「かきこもらむ」として出立するのが、このCC′（私注―同然）の場面である。

と考えられる。もっとも「無名草子」評言の後半「鏡持て来て―」の部分は、女中納言出産後の死と蘇生の時期ではなく、例えば四の君と出逢いの折とすれば、八十六番左のケースと類似した場面も想像されよう。

八十五番左右との関連を見ると、左の両歌（八十五・八十六）は特に深い照応もなく、かかって八十五番右とのつながりに問題があろう。

一、「今宵の月の影を忘るな」（八十五）と、小木氏のいわれる「女君の独詠ではなく、そう言いかける相手が、そこにいる」ならば、「君があたり……はなれじ」（八十六）と紫の上に訴える立場に共通性があろう。いずれにせよ、詠者にすれば、心中の苦悩や悲哀の情を訴える相手の存在を認めなければならない。

一、相互に「別れ」を意識している。

一、「雲となり煙とならむ」（八十五）に対して、「身はかくてさすらへぬとも」（八十六）の語句がある。

との理由から、八十五番右→八十六番左の照応を考えたい。また八十六番右への影響を考えると、

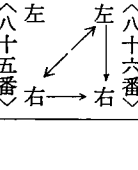
一、「こもりゐ給へる」「雲となり煙とならむ」（八十五）に対して、「かきこもりなむ」「この世をかぎる」（八十六）など語句の類似が見られる。

一、ともに相手との訣別を意味している。

一、共通して女中納言の詠である。

などの諸点から、八十五番右→八十六番右とも考えられよう。ついで八十六番の番いを見ると、

一、紫の上との別離の情を鏡の影に托する源氏の悲傷（左）と、女姿に戻れば、仮初の妻四の君と二度の逢うを得ぬと、別れの歎き深い女中納言（右）と、共通性があろう。



一、前述した通り、「無名草子」評言に鏡に関する記述がある。「四の君のもとに、あからさまに立ち入」った折、何かの事情で鏡にみいる事があったのか、小木氏のいう出産後の死と蘇生の頃だったのが、古本なきいま判然とはしないが、一応「鏡」の存在という共通性を指摘しておきたい。

以上のことから、別掲の図のような相互関係を示しておくことにする。

四

ひき続いて八十七番の番いに触れる。

左　浮舟（うきふね）の君、宇治に渡（わた）してのち

右大将
里の名も昔ながらに見し人のおもがはりせるねやの月影

右　式部卿の宮の御忌にこもり居て女君に　内大臣　宮宰相
恋ひわびてながき夜すがら寝覚むればならはぬ秋の月を知るか
な

左の歌は東屋の巻末に位し、薫の詠。浮舟と対面、一夜を語らった薫〔⑥‖五六〕は、翌暁彼女を車に乗せ、辨・侍従を従えて宇治に伴なう〔六〇〕。その美貌に心そそられる薫は、今後の処置を思いめぐらす折から、辨の歌を手にして心情を吐露する条。なお「風葉集」巻十七、雑二に詞書「浮舟の君具して宇治にまかれりけるに、辨の尼「むかしおぼえて澄める月かな」といひて侍りければ　薫大将」と題して入集されている。

右は、式部卿の宮（宰相の父君）の御忌にこもっている折に、女中納言（小木氏のいう「女中納言が、既に心身の転換を完了し、宰相の正妻の座におさまって以後の場面」との判断は当っていよう）に与えた内大臣の歌である。なお詠人名が「内大臣　宮宰相」となっているのは、判断に迷うところだが、一応「この頃は中・大納言の位にあったと考える」小木氏の立場に拠っておきたい。今本の場合、女主人公（元の権中納言）の転換以後の身分は中宮で春宮母、古本では内大臣上で権中納言母となる。なお「風葉集」巻十五、恋五に詞書「秋のころ、離れて侍りける女につかはしける　とりかへばやの内大臣」として入集。なお初句「恋ひわぶる」結句「風を知る哉」とする。また「かへし　権中納言母」として、「君はさや思ひ知るらむわれはただいつともわかず秋の心は」をも載せている。

八十六番との関連を見るに、歌暦流謫を目前に、紫の上と愛を誓う光源氏の心情は、離別の悲愁に満ちていただろう（八十六・左）。一方の薫とても、憂し里の名宇治にて、目前の浮舟を通して想起されるのは忘れ得ぬ大君の映像であった（八十七・左）。それは換言すれば、

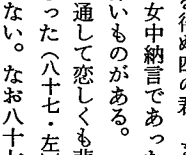
一、源氏の紫の上に寄せる想い（八十六）に対して、片や薫の大君に寄せる慕情（八十七）。

一、「君があたり去らぬ」「影ははなれじ」（八十六）に対する「昔ながらに見し人」「おもがはりせる」（八十七）と、心中深く慕う対象への方向は共通している。

一、物語本文を見るに、共通して贈答歌の体裁を成している（源氏・紫の上、辨・薫）。

などの照応を考え得よう。八十六番左→八十七番左とする理由である。なお八十六番左から八十七番右を見ると、共通して別離の情を相手に訴えている。紫の上と久しく逢い得ぬ想いに沈潜する源氏（八十六・左）に対して、女君（もと女中納言）に「恋ひわびてながき夜すがら寝覚」める内大臣（八十七・右）の心情は同類項のものであろう。また物語本文に徴するに、ともに贈答歌の呈をなしている。八十六番左→八十七番右とする所以である。

八十六番右から八十七番左への流れを追ってみよう。本性の女姿に戻ってしまえば、二度と逢うを得ぬ四の君。まさに「この世をかぎる」思いの女中納言であったろう（八十六・右）。訣別の情深いものがある。一方の薫とても、眼前の浮舟を通して恋しくも悲しい、それは大君の映像であった（八十七・左）。ともに縁なき心情とはいえない。なお八十七番左→八十七番右



の位置づけは、共通して①「月」の存在②物語本文で贈答歌の形式を取っている―点からも肯定されるところであろう。以上の諸点をまとめると、別掲のような照応関係を認め得るのではなかろうか。

（注）

（1）樋口芳麻呂氏「物語二百番歌合と無名草子」（国語国文学報・第三十八集、昭和五十六年三月）

（2）松尾聡氏「平安時代物語の研究」（昭和三十年六月、東宝書房）。同氏引用文はすべて本書に拠る。

（3）小木喬氏「散逸物語の研究―平安・鎌倉時代編」（昭和四十八年二月、笠間書院）同氏引用文はすべて本書に拠る。

（4）樋口芳麻呂氏「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」（昭和五十七年二月、ひたく書房）

なお本稿の続編は、「甲南国文」第三十四号（昭和六十二年三月刊）に掲載した。併せお読み載ければ幸甚である。